

令和 6 年 6 月 1 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00207

研究課題名（和文）障害者の芸術表現をoperaにする社会システムの研究：社会的排除の克服にむけて

研究課題名（英文）Research into the social system that turns artistic expression by people with disabilities into opera: Toward overcoming social exclusion

研究代表者

川井田 祥子（KAWAIDA, Sachiko）

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：40567632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：「承認」をキーワードに障害者の就労を捉え直すとともに、障害者が表現活動によって社会的排除を克服する可能性を検討した。「承認」とは、他者から存在を認められ尊重されることであり、近年の社会政策では就労によって承認されることが重要だと考えられているため、表現活動が承認されるとともに、就労に結びつく可能性について検討した。明らかになったことは、障害者の芸術表現をoperaとするには、本人が多様な表現活動を選択できることと、学童期から多様な表現にふれられる教育環境の整備など、生涯学習を継続して行える環境を保障することが必要だということである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害者の表現活動を仕事にしようとする取り組みをしている国内外の団体等の調査によって、障害者を訓練によって健常者に近づけて就労をめざすのではなく、経済成長を過度に追求する社会のあり方を問い直し“就労”という概念そのものの転換を図ろうとしていることが明らかとなった。これらの調査をふまえて、“承認”をキーワードに障害者の就労を考えることは多様性を尊重する政策への転換をもたらす、さらに経済成長のあり方をも問い直すことになるため、障害者のみならず誰もが生きやすくなる社会へと変化する契機になると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Using "recognition" as a keyword, I reexamined employment for people with disabilities and examined the possibility of people with disabilities overcoming social exclusion through expressive activities. "Recognition" means having one's existence recognized and respected by others, and in recent social policies it is considered important to be recognized through employment, so I examined the possibility that expressive activities can be recognized and linked to employment. What became clear is that in order for artistic expression by people with disabilities to be considered opera, it is necessary to guarantee an environment in which they can continue lifelong learning, such as allowing them to choose a variety of expressive activities and creating an educational environment in which they can be exposed to a variety of expressions from school age.

研究分野：文化経済学

キーワード：障害者 芸術表現 社会的排除 opera 承認 well-being

## 1. 研究開始当初の背景

「障害者は健常者と同じように働いて経済的価値を実現することをめざすべきであろうか」ということが本研究の問いである。近年、わが国では障害者の芸術表現への関心が高まり、特に美術分野での活動が注目されて国内外で高い評価を得るようになった。こうした動向は1990年代から先駆的な福祉施設の取り組みが奏功したからであるが、障害者福祉関連の制度に影響を及ぼすまでには至っていない。たとえば2006年に国連総会で「障害者権利条約」が採択され、日本は2014年1月に批准、2016年4月に「障害者差別解消法」が施行されて障害者の尊厳と権利とを保障する環境整備がめざされているものの、特別支援学校卒業後の進路に芸術表現が選択肢として位置づけられているわけではない。

ほとんどの障害者福祉施設において働くことが社会参加の一つの手段であると考えられ、健常者と同じような速さで同じことができるようにと訓練が行われており、芸術表現は余暇活動に過ぎないと考えている施設が多くある。よって、いかにすぐれた芸術的才能をもっている障害者であるというだけで、芸術家への道はほとんど閉ざされているのが現状である。

そもそも仕事や労働はどのような意味をもつものなのか。今村仁司は古代ギリシアの労働観を参照し、古代においては近代人の考えるような労働(labour)は基本的に奴隷的労働であり、生存のために日々反復しなければならないものだったという(今村[1988]『仕事』弘文堂)。その後、近代化が進展する中で、個人による所有権を市民の自由の基礎をなすものとして無制限に承認しようとした哲学者ジョン・ロックは、労働(labour)を価値ないし富の源泉と位置づけ、あらゆるものに価値の差異を生じさせるのは労働であるとした。そして、近代産業社会の成立とともに勤労の精神が称揚され、勤労度の差によって個々人の財の不均衡が生じるのは当然であるとして、所有量の不平等が是認されるようになった。つまり近代産業社会の成立とともに労働が上位に置かれ、より生産的な未来のために労苦を甘んじて受け入れるべきという意識を人々は抱くようになっていったと考えられる。また“障害”という概念は近代化の過程で生み出されたものであり、工場労働において合理的・効率的に働くことのできない人々を障害者と位置づけて社会に周縁に追いやっていったことも、人々が上述のような意識をもつに至ったことと合致するであろう。

1990年代に先進諸国で社会的排除への注目が高まり、ノーベル経済学者のアマルティア・センのケイパビリティ(潜在能力)アプローチが着目されて、人間を単に効用を追求する存在と見なすのではなく、ケイパビリティを発揮し自分自身の価値を形成していく主体だと捉え、それぞれの能力を発揮できる環境を整える社会政策が求められるようになった。

そこで本研究においては、経済的価値を実現する行為が労働であるという狭義の労働観から脱却し、セルフエスティーム(自己肯定感)を育みながら周囲の人々との豊かな関係を創造できる芸術表現をopera(ラテン語で「仕事」、生きる喜びの表現という意味)と位置づけ、社会的排除を克服する社会システムを検討していく。

## 2. 研究の目的

1990年代から欧州において、芸術文化の持つ創造性を障害者の自立や貧困コミュニティの再生に役立たせようという社会実験と調査研究とが急速に広がり、「芸術文化による社会的排除の克服」が新たな研究課題として浮かび上がってきた。社会的排除とは所得の低さという一次元的要因で起こるのではなく、多次的要因によって引き起こされるため、既存の社会保障制度だけ

ではなく多面的な支援策が必要である。さらに、社会とのつながりが脆弱なため、排除された人々は孤立を感じセルフエスティームの低下を招きやすいという特徴がある。

また、近代化の過程において、かつて苦役だった“労働(labour)”が富ないし価値の源泉とみなされるようになった変化と、“障害”という概念が生まれ障害者が社会の周縁に追いやられた変化はほぼ同時期にみられる。

本研究では芸術のもつ多面的な機能に着目し、障害者の芸術表現が多様な価値実現の可能性を有することを実証するとともに、経済的価値を実現する行為が労働であるという狭義の労働観から脱却し、セルフエスティームを育みながら周囲の人々との豊かな関係を創造できる芸術表現を opera と位置づけ、社会的排除を克服する社会システムを検討することを目的とする。

### 3. 研究の方法

主要な研究方法は以下に記したとおり、福祉施設へのインタビュー調査、海外調査、研究会等の開催であり、文献調査も並行して実施した。

#### (1) インタビュー調査

先駆的に芸術表現活動を採用し、障害者の新しい仕事を生み出している福祉施設「ぬかつくるところ」(岡山県都窪郡)、「スウィング」(京都市)、「カプカプ」(横浜市)、「アートセンター画楽」(高知市)、片山工房(神戸市)などを訪れて調査を実施した。また、各団体が主催するイベント等にも出かけ、そこで発言されている内容や配布資料等を入手するなど、多面的な情報収集に努めた。加えて、厚生労働省が推進している「障害者の芸術文化活動普及支援事業」の報告会にも参加した。

#### (2) 海外調査

精神障害者をプロの俳優に育成して演劇活動を展開しているイタリアの「アルテ・エ・サルレー」劇団を訪問した。加えて、2012年ロンドン五輪の文化プログラムの主軸の一つであった「アンリミテッド」プロジェクトに関する文献調査を実施した。

#### (3) 研究会等の開催

2021年11月28日「包摂型アート研究会」。講師は、同年に開催された東京パラリンピック競技大会の開会式でパフォーマンスを披露した障害をもつアーティストたち(ダンサーの森田かずよ氏、パフォーマーの中村大輝氏)、ステージアドバイザーの栗栖良依氏である。

2023年7月14日「出版記念シンポジウム」。講師は、三木裕和氏(立命館大学産業社会学部教授、元鳥取大学地域学部教授)、國本真吾氏(鳥取短期大学 教授、全国専攻科(特別ニーズ教育)研究会会長)である。

### 4. 研究成果

上記3の(1)~(3)による研究成果は以下のとおりで、成果の一部を取りまとめた書籍も刊行した。

#### (1) インタビュー調査

先駆的に芸術表現活動を採用している福祉施設に共通する理念は、障害者を訓練によって健常者に近づけて就労をめざすのではなく、経済成長を過度に追求する社会のありようを問い直し“就労”という概念そのものの転換を図ろうとすることであった。「障害者だから」ではなく、現代社会が多くの人々にもたらしている「生きづらさ」をゆるめる契機となるよう、それぞれの取り組みを発信していることが明らかとなった。

#### (2) 海外調査

「アルテ・エ・サルデー」劇団の調査から、イタリアの精神医療改革の歴史的背景や社会的協同組合の位置づけに関する知見を得た。「アンリミテッド」プロジェクトの調査からは、イギリスにおける障害者運動の歴史とアート活動との関連に関する知見を得た。

### (3) 研究会等の開催

「包摂型アート研究会」によって、パラリンピック開会式会場へのアクセス支援を行ったり、当日までの準備をサポートする支援者の存在など、環境整備を十全に行えば、誰にでも可能性が拓かれることが明らかとなった。加えて、パラリンピック開会式という世界的に注目される舞台上でソロダンスを披露したことは、森田氏のキャリアアップに大きな影響を与え opera を具現化した好例としても考えられる。

「出版記念シンポジウム」によって、障害者の芸術表現を opera とするには、本人が継続して表現活動に取り組む基盤整備が必要であることが明らかとなった。つまり、学童期から多様な表現にふれることのできる教育課程の整備のみならず、学校卒業後も自身の望む余暇活動などに取り組める環境整備、すなわち生涯学習を継続して行える環境を保障することが不可欠だということである。「学校から社会へ」の移行の際、たんなる経済的自立をめざすだけでは本研究のテーマである opera の具現化は難しく、一人ひとりのセルフエスティームを育みながら、潜在能力をみきわめ、それぞれに適した仕事を選択できるような環境づくりのために、学校との連携も視野に入れることが今後の研究課題として浮かび上がった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川井田 祥子	4. 巻 115
2. 論文標題 「障害者アート」という枠組み再考	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 都市問題	6. 最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川井田 祥子
2. 発表標題 障害者の芸術表現
3. 学会等名 ラハブ（韓国）+ 神戸大学人間発達環境学研究科共催 オンライン国際シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 川井田祥子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 176
3. 書名 障害者と表現活動：自己肯定と承認の場をはぐくむ	

1. 著者名 佐々木雅幸・敷田麻実・川井田祥子・萩原雅也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 水曜社	5. 総ページ数 320
3. 書名 創造社会の都市と農村：SDGsへの文化政策	

1. 著者名 野田邦弘・小泉元宏・竹内潔・家中茂	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 アートがひらく地域のこれから：クリエイティビティを生かす社会へ	

1. 著者名 佐々木雅幸・赤坂憲雄	4. 発行年 2020年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 192
3. 書名 創造する都市を探る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	佐々木 雅幸  (SASAKI masayuki)  (50154000)	同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員   (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------